



離島勤務と社会人大学院の関わり

☆推薦文☆ 2013年2月に貝原俊樹先生より「家庭血圧のつけ方によって、家庭血圧と診療所血圧との違いや血圧コントロール、ひいては脳卒中などのアウトカムが異なっているかについて、後ろ向きでも調べることが出来ないか」ということでCRSTに研究支援依頼がありました。臨床高血圧の研究では日本および世界をリードしている自治医大循環器内科として支援したいと思い、手を挙げさせてもらいました。まさに、貝原君が離島における第一線の臨床現場から生じたクリニカルクエスチョンであり、私が佐賀の離島で経験したことも生かせるのではないかと思います。その後苅尾教授のご高配もあり、社会人大学院生として義務年限を有効に使い研究活動を行っています。一つ目の研究は遠隔モニタリング機能付きの家庭血圧計を用いたRCTでした。限られた患者数、時間、検査機器の中で見事に研究を成功させ、発表した研究会では優秀賞までもりました。その後も順調に研究活動、論文執筆、大学院のノルマをこなしています。主にメールによる遠隔指導ですが、打てば響く人材でありこの先が楽しみです。今後もこのような形で「人を育てる」ことに重点をおいたサポートをしていければと思います。

自治医科大学 卒後臨床研修センター／循環器内科 江口和男

新島村国民健康保険本村診療所 貝原俊樹（東京32期卒業）

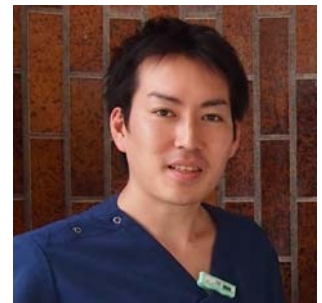
皆様はじめまして。本学東京32期卒の貝原俊樹と申します。本稿執筆現在（2016年5月）社会人大学院3年生ですが、離島勤務と社会人大学院について感じていることをつれづれなるままに記そうと思います。

東京卒の本学卒業生は原則的に医歴3年目まで内地の総合病院で研修し、4年目から離島医療に携わります。東京都には奥多摩町、檜原村といった多摩西部の山間僻地もありますが、やはりメインは伊豆諸島、小笠原諸島といった離島医療になります。

私も例外ではなく、4、5年目は新島（人口約2300人）で勤務し、6年目の後期研修を挟んで7年目が式根島（人口約550人）、8年目の現在は再び新島で勤務しています。当初は社会人大学院のことなどつゆ知らず、一心不乱に離島医療を行っていました。ところが4年目の新島勤務中、東京27期の佐藤敏秀先生が減圧症に関する英語論文を完成させた（News Letter Vol.47に寄稿されました）のを始めとして、立て続けに先輩方が離島勤務中に論文を生み出していきました。この先輩方のアクティビティの高さに刺激を受けました。

また、3年目に内地の総合病院で勤務していた際、とある（優秀だが鬼のように怖い）上司からこのようなことを言われました。「自治医大卒は優秀だし、頑張っているのは分かる。ただ何をやっているのかが良く分からない。別に一匹オオカミになってるわけじゃないと思うけど」。このコメントに誇らしいやら悔しいやら複雑な感情を持ったのを覚えています。

離島勤務中、特に昨年度の式根島のように医師1人、看護師2人、事務1人とリアル「Dr.コトー」状態の時は、365日24時間オンコールという精神的重圧、責任はかなりのものだと思いますが、その一方で肉体的には内地総合病院であくせく働いている時の数分の一のストレスであることも事実でした。きっかけは先輩方の活躍でしたが、4年目の終わりに「研究をやってみようかな」と考え出すようになりました。「自分は離島でこういうことをやった」という足跡を自分のために分かりやすく残したい、という不純(?)な気持ちも多分にあったかもしれませんが。



そうと決まれば話は早く、News Letter で存じ上げていた CRST に御相談すると、担当教員として江口和男先生（佐賀 16 期）を紹介して頂きました。ここからは正に 2 人 3 脚で研究を進め、論文を完成させることが出来ました¹⁾²⁾。江口先生の勧めもあり、また、どうせ研究や論文作成を進めるならば学位取得という目標があった方がいいだろうという思いもあり、医歴 6 年目で社会人大学院に入学しました。これまでに多くの先生方が寄稿しているので割愛しますが、論文作成時のルール、統計解析、ラボノートの書き方、オンライン投稿の仕方、査読者側の思い、reject された経験、accept された時の安堵感、研究者としての大局的視点など、これまで経験していなかった様々なことを離島勤務中に学ぶことが出来ました。

しかし、このようなテクニカルなことよりもためになったのは、何と云っても様々な方との出会いでした。江口先生を始めとして、卒後ほぼ会っていなかった同期や、在学中ほぼ絡みの無かった先輩、本学の医局の先生方、研究会や学会など発表の場での新たな出会いなど、大きく世界が広がりました。自分はライブ的な存在がいなくてどうしても怠けがちになる性質なのですが、年齢の近い研究者が国内外問わず活躍しているのに接するのは刺激になりました。離島勤務では必然的に同業者との出会いは限られてしまいます

（もちろん島民との素敵な出会いは無数にあります（笑））。研究活動をしてみようと思いついてからまだ 3 年程しか経っていませんが、ふと振り返ると離島勤務だけでは体験しえない出会い、学びが既に濃厚に蓄積されていることに驚いています。

現在も前向き臨床研究を多施設共同研究という形で進行中です。これまでは「前向き多施設共同研究」など抄読会で読む程度の距離感でしたが、そのような研究に実施者として携わっていることは貴重ですし、時間的にも立場的にも僻地医療中だからこそ出来るのかもしれないとさえ思います。

とりとめもない文章になりましたが、社会人大学院は様々な魅力ある人との出会い、そして臨床一辺倒になりがちなへき地医療に「研究活動」という彩りを与えてくれました。また、手技などの技術面ではどうしてもデメリットが多くなりがちな離島勤務中に、「今やれる範囲でベストを尽くす」ことの大切さも肌で感じました。この場を借りて、担当教員の江口先生、苅尾先生、オープンラボコーディネーターの亀崎先生を始めとした関係者の方々に御礼申し上げます。もしも興味を持った後輩が現れれば、出来る限り引き継いでいこうと思っています。

- 1) Kaihara T, Eguchi K, Kario K. Home BP monitoring using a telemonitoring system is effective for controlling BP in a remote island in Japan. J Clin Hypertens (Greenwich). 2014 Nov;16(11):814-9.
- 2) Kaihara T, Eguchi K, Hoshide S, Kario K. Evaluation of day-by-day variability of home blood pressure using a home blood pressure telemonitoring system. Blood Press Monit. 2016 Jun;21(3):184-8.

！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先:地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープン・ラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7044/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>